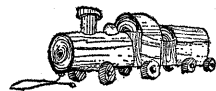


# 幼児教育機構第十二回世界会議報告

## 西 本 脩



わたしはこの夏ワシントンで開かれたオメップ (OMEP) の第十二回世界会議に出席しました。この会議の模様をお知らせしたいと思いますが、その前にオメップとはどんなものかというようなことを紹介しておきましょう。

### オメップの目的について

オメップ (OMEP) とは、フランス語の Organisation Mondiale pour l'Education Présoolaire のかしら文字でできた略語で、日本語に訳すと「世界幼児教育機構」となります。これは、八、九歳までの乳幼児に関係がある仕事をしたり、乳幼児に興味や関心をもった、いろいろな地位の人びとを集める教育機関で、幼児に関する研究の促進・幼児についての知識の普及・幼児に影響する不満足な有害な条件の改善、といった仕事をします。

オメップの目的は、(1) 幼児の研究と教育をうながすこと、(2) 幸福な幼年時代と家庭生活をおしすすめる、各国間のよりよい理解と世界平和に役だてること、(3) 幼児についてより多くの知識や技能を得て、子どもの欲求を満たす機会をどのように与えるかについて知るための助けをすること、(4) これらの目的にかなうよう協力する機会や可能性を、いろいろな職業や組織の人びとのために備えること、です。オメップは、(1) 幼児教育者、心理学者、小児科医、児童精神科医、社会事業家、建築家、行政官など、さまざまな職業の人びと、幼児の健全な成長発達に興味や関心を持つあらゆる人びとと、(2) 人種・宗教・信条・国籍・政見をこえた全世界のいろいろな国々に、との代表者にもとづく集会を準備しようとしています。

オメップは、ユニセフ (国連国際児童緊急基金)・ユネスコ (国

連教育科学文化機構)などの国連の機関と協力的な地位を持ち、ユニセフとは子どもの発達・養護・健康に関する事からで共通の関心を持ち、ユネスコとは子どもの教育や成人訓練について、興味や関心をわかち合っています。

### オメツプの沿革について

一九四六(昭和二一)年三月、世界大戦後の混乱がまだ残っていたころ、イギリスのアレン女史(Lady Allen of Hurtwood)がスカンジナビアへ講演旅行をしていました。彼女は、ノルウェーのエラ・エスプ夫人(Miss Ella Esp)や、スウェーデンのアルヴァ・ミルダル夫人(Mrs. Alva Myrdal)のような幼児教育に関心を持つ多くの人びとと会い、幼児のよりよい理解を助け、幼児教育の分野で働く人びとがいつそう密接な関係を保つために、国際的な機関を新しく設けることについて意見をかわしました。

一九四六年七月にロンドンに集まった、各国の幼児教育に関心を持った一群の人びとが、十一月にバリのユネスコ・ハウスに再び集まって、非公式の準備委員会を結成しました。そして、幼児教育の世界機構を創設する計画が、数日後のユネスコの会議に提案され、ユネスコの同意と暖かい支持を得ました。一九四七(昭和二二)年五月には、コペンハーゲンで準備委員会が開かれました。そしてついに、一九四八(昭和二三)年五月バリの集会で、

同年八月プラハ(チェコスロバキア)で開かれるユネスコ主催の「世界児童教育セミナー」に引き続いて、同じ所で「世界幼児教育会議」を催し、これに各国政府・多くの団体や個人が参加するよう招待状を送ることを決めました。

この会議には、五つの大陸から十八か国の代表者が集まり、指導的な心理学者や教育者の講義をもとにして、重要な専門的な討論が行なわれましたが、おもな仕事は、国際的な機関をつくる組織的な計画を立てることでした。この第一回世界会議の議長であったスウェーデンのアルヴァ・ミルダル夫人がオメツプの初代総裁になりました。プラハ会議の精神で幼児教育の仕事にたずさわる国内委員会が、間もなく十一か国に設立されました。

第二回の世界会議は、一九四九(昭和二四)年八月に、バリのユネスコ・ハウスで、イギリスのアレン女史を議長として催され、三三か国の代表者が集まり、オメツプ憲法が採択されました。

その後、世界会議は、次のような都市で一年おきに開かれました。

第三回 一九五〇(昭和二五)年 ウィーン(オーストリア)  
テーマは「幼児の基本的欲求」議長はエルビニエール・ルベール夫人(Mme Herbinier-Lebert)(フランス)

第四回 一九五二(昭和二七)年 メキシコシチー(メキシコ)

テーマは「幼稚園・保育園の社会的役割」 議長はエルビニエール・ルベール夫人（フランス）

第五回 一九五四（昭和二九）年 コペンハーゲン（デンマーク） テーマは「幼児教育の教師の選抜と養成」 議長はエルビニエール・ルベール夫人（フランス）

第六回 一九五六（昭和三一）年 アテネ（ギリシア） テーマは「子どもの生後一年間の重要性」 議長はハラルド・フレンスマーク氏（Mr. Harald Flenmark）（デンマーク）

第七回 一九五八（昭和三三）年 ブリュッセル（ベルギー） テーマは「幼児の生活における連続性と統一性の重要性」 議長はハラルド・フレンスマーク氏（デンマーク）

第八回 一九六〇（昭和三五）年 ザグレブ（ユーゴスラビア） テーマは「児童期への遊びの活力」 議長はベス・グディクーンツ夫人（Miss Bess Goodkowitz）（アメリカ）

第九回 一九六二（昭和三七）年 ロンドン（イギリス） テーマは「幸福で健康な来たるべき世代」 議長はヘイズル・ギャッバード夫人（Miss Hazel Gabbard）（アメリカ）

第十回 一九六四（昭和三九）年 ストックホルム（スウェーデン） テーマは「急に変わりつつある世界における子ども」

議長はグルダ・スカール夫人（Mrs. Åse Gruda Skard）（ノルウェー）

第十一回 一九六六（昭和四一）年 パリ（フランス） テーマは「子どもの生活におけるおとなの役割」 議長はグルダ・スカール夫人（ノルウェー）

第十二回 一九六八（昭和四三）年 ワシントン（アメリカ） テーマは「子どもの権利—その可能性の認識」 議長はグルダ・スカール夫人（ノルウェー）

オメツプの加盟国について

オメツプの加盟国は、次のとおりです。アルゼンチン、オーストラリア、オーストリア、ベルギー、ブラジル、カナダ、チリ、チエコスロバキア、デンマーク、フランス、ドイツ、ギリシア、ハンガリー、イスラエル、イタリア、レバノン、メキシコ、ノルウェー、南アフリカ、フィリピン、スウェーデン、スイス、イギリス（連合王国）、アメリカ合衆国、ウルグアイ、ベネズエラ、ユーゴスラビア——以上の二十七か国には、オメツプ国内委員会があります。

コロンビア、フィンランド、アイルランド、日本、ニュージーランド、ポーランド、スペイン——以上の七か国には、オメツプ準備委員会があります。

準加盟国は、グアテマラ、インド、タイの三か国です。そのほか、個人会員がいる国は、ガーナ、ハイチ、インド、イラク、モ

ーリシアス、オランダ、シンガポール、タイ、チュニジアの諸国です。

### オメックと日本との関係について

オメックと日本との関係は、一九六一（昭和三六）年七月に、スイスのジュネーブで開かれた国際公教育会議（この会議で「就学前教育について」の各国文部省に対する勧告第五三号が採択された）に出席した文部省の奥田真丈氏（当時初等教育課長補佐、現在大臣官房調査課長）が、同会議に出席したアメリカ教育局のヘイズル・ギャップバード夫人からオメックの話聞き、これを同年九月欧米の幼児教育事情視察に出発する大河内四郎氏（前日本私立幼稚園連合会理事長）に伝え、ギャップバード夫人への紹介があり、大河内氏がアメリカを訪問したとき（同年十一月）ギャップバード夫人に会い、一九六二年のロンドン会議へ日本の参加要請を受けたことから始まります。

そして、第九回ロンドン会議に初めて、わが国からも日私幼稚園係者十名がオブザーバーとして参加し、ギャップバード夫人に、日本も将来正式加盟の意志のあることを表明し、意見の交換をしました。翌一九六三（昭和三八）年、研究のため渡欧中の日名子太郎氏（玉川大学教授）がストックホルムで、スウェーデン国内委員会会長でオメック副総裁のリーザ・スメッドバーグ夫人（Lisa

Smetherg）に会い、日本の加盟について意見を交換するともに、第十回ストックホルム会議への日本の参加を約束しました。

そして、一九六四（昭和三九）年のストックホルム会議には、わが国から二九名がオブザーバーとして参加しました。

未加盟国で参加している国々からの状況報告の時間に、日名子氏が日本の幼児教育の状況を報告し、スカール総裁をはじめ、オメック役員から、日本の正式加盟を要請され、日名子氏、多田鉄雄氏（一橋大学教授）、池田節夫氏（日私幼事務局長）の三氏がオメック本部との連絡員になりました。

そして、一九六五（昭和四〇）年四月にたまたま来日したスメッドバーグ夫人との懇談を機会に、わが国の幼児保育関係諸団体が正式参加のための話し合いが進められ、一九六六（昭和四一）年一月に山下俊郎氏（日本保育学会会長）を会長として、国内準備委員会が結成されました。同年七月のバリ会議にもオブザーバーとして多くの人が参加しましたが、このときわが国からの正式加盟の申し出を行ない、国内準備委員会から規約をオメック本部に提出し、規約委員会にかけられ、正式に加盟を承認されることになりました。なお、このバリ会議でも、小川正通氏（日本保育学会副会長）が日本の状況を報告しました。

オメックの日本国内準備委員会を構成している幼児保育関係の団体は、次のとおりです。(1)日本保育学会、(2)日本私立幼稚園連

合会、(3)全国国公立幼稚園長会、(4)全国国公立大学付属学校連盟幼稚園部会、(5)日本私立短期大学協会保育科連絡協議会、(6)全国社会福祉協議会保育協議会、(7)全国保母養成協議会、(8)全国私立保育園連盟。

### オメップの第十二回世界会議について

オメップの第十二回世界会議は、前記のとおり、「子どもの権利」その可能性の認識」というテーマのもとに、去る七月三十一日(水)から八月七日(水)まで、アメリカの首都ワシントンのスタトラ・ヒルトンホテルで開催されました。前述の加盟国・準加盟国をはじめ三七か国から七三〇名の参加者がありました。オメップの性格上、その大半は婦人でした。参加者は、教育学者・児童心理学者・保育者養成機関の指導者・幼稚園教員・児童福祉施設保母など、いろいろな職業にたずさわっている人びとでした。

会議中の使用語は、英語・フランス語・スペイン語のうちの前記に限られ、三か国語の同時通訳がイヤホンで聞かれるようになっていました。地理的条件もあってか、中南米のスペイン語を話す国々への人びとが、参加者の過半数を占めていました。オメップ加盟を正式に承認された日本からは、国内準備委員会会長の山下俊郎氏、ご夫妻・多田鉄雄氏・日名子太郎氏・武井幸子氏・

長沼依山氏ご夫妻・筆者ら一六名が参加しました。

まず、開会式が初日の午後八時から行なわれ、アメリカ国内委員会会長のエミー・ホスラー博士(婦人)、ユニセフの代表者(黒人)、ワシントン市知事(黒人)、オメップ総裁グルーダ・スカー博士(ノルウェーの婦人)、アメリカ健康教育福祉長官(日本の文部・厚生両大臣を兼任したようなもの)のあいさつがあった。二日めから以後は、毎日朝から夜半まで、聴講・討論・聴講・討論……の明け暮れで、わたしは音を上げそうになりましたが、外国人のスタミナの強さには感心しました。

二日めは、イギリスのエセックス博士(婦人)の「子どもの権利」その可能性の認識」と題する講演を聞き、そのあとこの講演内容に基づいて、二〇のグループに分かれて、午前午後にわたる二時間半の討議が行なわれました。わたしの参加したグループは、スウェーデンの婦人が座長で、米・英・カナダ・イスラエルなど十人余りの婦人で、男はわたしひとりでした。子どもに拍車をかける教育ママ・過保護で子どもの自主性をそごう母親のことなど、おもに親子関係の問題が話し合われました。グループ別討議のあとは、また全体会議で、各グループの代表者から、討議内容の報告が行なわれました。

三日め午前中は、三つの討論会が同時に開かれました。第一室は「幼児とその両親の立場から見た都市計画・住宅・遊び場」の

テーマで、都市計画立案者・建築家・弁護士・社会事業家・小児科医が提言、第二室は「両親に対する知識の提供」という題で、小児保健や児童心理の知識を大衆化するための、教師・マスコミの役割について、教師・精神科医・小児科医・出版・テレビ・ラジオの代表者が発言、第三室は「文化をなく奪われた子どもに対する計画」という主題で、アメリカ経済機会局が現在貧乏追放の一環として推進しているヘッドスタート計画 (Headstart Program) の報告が行なわれました。

午後は、二〇余のグループに分かれての討議。総会は、夜八時半から開かれ、会則改正の逐条審議でひまどり、山下会長のあいさつは夜半になりましたが、ここでも外人のねばり強さに感心しました。

四日めは、カナダのラポワン博士 (R. Lapointe) の「子どもの発達における教師の特性」と題する講演と、それを中心にしたグループ討議が午後まで続けられ、幼児教育における教師の役割の重要性が再確認されました。

七日めは、アメリカの有名な文化人類学者マーガレット・ミード博士 (婦人) が監修した「四つの家族」という映画を見たのち、「幼児に及ぼす文化の影響」という題で討論会が開かれ、映画の中に出てきたカナダ・フランス・インド・日本 (日名子氏) の代表が発言、映画の内容がそれぞれの国の実情と異なっている

ことが指摘され、親子関係・夫婦関係・母親の育児態度と幼児の性格との関連について、活発な議論がたたかわされました。

会議期間中、別室では参加各国の幼児教育関係の映画やスライドが上映され、幼児教育関係の図書・パンフレット・雑誌、幼児用図書・絵本、遊具・教材・教具などの展示会が開かれています。また、日本から出品した幼稚園の写真は好評でした。また、「幼稚園施設大鑑」を見いだしてうれしくなり、多くの参加者が持っている日本製のカメラや、所々で回っている日本製のカセット・テープレコーダーを見ては、日本人の誇りを感じたものでした。

最後に、少し余談になりますが、六日めの夕方、四か所に別れてのレセプションが催されました。わたしは運よく、希望どおりの ACEI (Association for Childhood Education International) のレセプションに出席することになりました。

ここは、津守真先生がよくこの誌上に紹介しておられるアメリカの有名な雑誌「Childhood Education」を発行している所です。案内されるまま二階の資料室に行きましたら、英語の書籍や雑誌の多い中に、わが雑誌「幼児の教育」がちゃんと並べてありました。いよいよ日本の幼児教育界も、国際的なひのき舞台に出る時期が来たことをひしひしと感じました。

(大阪樟蔭女子大学)